

# 身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域課題解決型キャリア教育

学校を地域に残すにはどうすれば良いのか、「教育振興協議会」で存続の方策を探るなかで提案されたのは、聞き書き活動でした。高校生にとっては先人に学ぶキャリア教育となり、地域にとってはその文化や魅力を発見し発信することで貢献できる。そんな思いからスタートした取り組みが4年目を迎えています。

## おじい、おばあへの 聞き書き調査で奄美の “地域の宝”を発見・発信する



### 第12回 大島北高校(鹿児島・県立)

取材・文／江森真矢子

奄美と聞いて何を思い浮かべるだろうか。理科の先生ならアマミノクロウサギをはじめとする固有の動植物、国語の先生なら『死の棘』の島尾敏雄だろうか。鹿児島島の南、琉球弧に連なる奄美群島は、亜熱帯植物に覆われた緑濃い島々だ。鹿児島とも沖

縄とも違う言葉、島の人に信じられてきた小妖怪ケンムンの存在など、独特の文化が色濃く残っている。

奄美大島には約4万4000人が暮らし4つの高校がある。ここでは集落のことを「シマ」と呼ぶ。大島北高校は島の一番北側、3つのシマからなる赤木木地区にある。この地域の歴史と文化についての聞き書き調査は2014年に始まった。

「聞き書きサークル」メンバー十数人が夏休みの3日間、グループに分かれて地域のお年寄りの元を訪ね、1日に数人の話を聞く。事前に聞き書きのコツを学んでから訪問するが、生徒には初めてのことばかり。聞く内容は「舌に懐かしい味」「伝え残したいもの」「苦しかったこと」「楽しかったこと」「北高に期待すること」など。1、2時間の取材中、話は多方面に飛び、いつの間にか大先輩である人の人生を丸ごと受け止めることになる。

学校に戻り報告書にまとめるがこれで終わりではない。初年度は実地調査もして地図を作った(左写真)。また、鹿児島大学から依頼を受けて生徒が研究会で調査報告を行ったり、

地域住民や小中学生に体験を伝えるなどアウトプット的機會も無い込んでくるので、活動は報告冊子の発行される3月まで緩やかに続く。

### 「学校を残したい」 卒業生の思いが出发点

島の人口減少に伴い、かつて12学級あった大島北高校の生徒数は現在99人。統廃合が取りざたされるなか、大島北高校は「学校教育振興協議会」を設置して学校の在り方を検討してきた。当時、会長を務めていた故・中山清美氏が学校の存続を願って企画し、奄美市の「魅力ある学校づくり支援事業」に採択されたのが聞き書き調査だった。中山氏は奄美市立奄美博物館館長も務めた文学博士(考古学)であり同校の卒業生。調査協力者への依頼や同行は、氏が関わってきた奄美郷土研究会のメンバーが担うこととなった(コラム参照)。

聞き書き調査がなぜ学校の存続につながるのか。15年の報告冊子『シマ(集落)に学ぶ』から中山氏の言葉を紹介しよう。「ローカル(シマ)に学び、グローバル(世界)に発信することが

できるのは先人たちが残したシマの最大の資源」。地域の自然と歴史、文化を見つめ直し、地域の人と共に未来を考えながら活動することは、地域作りを担うことにもなる。それが教育の特色となり、発信によって魅力が伝わってほしいと考えていたようだ。

初年度メンバーは、林野庁と文科省の共催から始まった「聞き書き甲子園」で鹿児島県代表に選ばれた。活動は地元メディアに何度も取り上げられるなど注目度は上がっている。

### 多様な人と関わる経験が 人生の糧になる

活動に注目したのはメディアや地元の人たちだけでなく、前述したように大学からの連携依頼も多くある。生徒は地域のお年寄りだけでなく、奄美を調査対象にする研究者や学生とも関わる機会が増えた。調査内容のデータベース化を行うのは東京大学の研究室。千葉商科大学の学生が奄美の観光シンボルを考えるワークショップにも参加した。

教頭の樋之口仁先生は「生徒たちのやっていることはまさに、島の宝



後列左から 樋之口 仁教頭、内野優太さん(3年)、川畑龍平さん(2年)、玉利 光さん(3年)、飛松千暁先生、佐藤望蒼さん(2年)、川原かのんさん(3年)



聞き書き調査は、地域の方の家を訪ねて行う。郷土料理をご馳走になることもしばしば



調査を基にまとめた地図



学校に戻ってまとめ作業。冊子にするためにパソコンで原稿入力もする



地域の方たちに聞き書き調査の報告を行うなど、島内外での発表の機会も多い

#### INTERVIEW



川畑 勉さん  
(奄美郷土研究会)

### 「知ることによって愛が生まれ、知られることによって誇りが生まれます」

調査対象者を探したり、引率をしています。高校と地域とのつなぎ役をやっていると、若い人と話したい、文化を伝えて残したいというお年寄りにたくさん会います。集落に若い人が少なくなり、北高にどんな子がいるのか知らなかったお年寄りにとっても、高校生が来ることで北高が少し近い存在になりました。

高校生たちは、近くにあったのにそれまで見ていなかったものをたくさん発見します。知ることによって愛が生まれ、知られることで誇りが生まれます。奄美はシマゴトに個性がありますが、かつての方言追放運動のように、学校が教えることが「正しいもの」になり、それ以外のものが消えてしまうこともあります。聞き書き調査は多様なものを多様なものとしてそのまま残すことに価値があるのではないのでしょうか。

正直なところこれが何かの役に立つのか立たないのか、わかりません。でも、だから面白い。聞き書き活動で地元の北高の名前がいろんなところに出てようになって、発展している様子は私も嬉しいです。

を掘り起こすこと。活動中は本当にいい顔をしています。生徒には自信をもって地域をアピールし、発展に貢献できる人になってほしい」という。「奄美を担う人作り」は学校の目標でもある。情報処理科の授業でも観光振興と絡め、地域情報の発信に取り組みでいく予定だ。

また「この先、人生のなかで迷い、苦しいことに直面したとき、戦争体験をしたおじい、おばあの話が生き延びてくる」という思いもある。昨年10月には、広島経済大学と琉球大学の教員によって、成果を「デジタルストーリーテリング」の手法でまとめる研修が行われた。これは、写真の上にナレーションを重ねて1、2分のムービーを作るというもの。飛松千暁先生は「こんな

### 視野が広がり 生き方を考えるように

課題解決を志向するなかで忘れてしまいうことももある、足元にある価値。地域の宝を掘り起こす聞き書き

ことまでできるんだ」と生徒の作品に感動しました。私たちがしたのは、時々アドバイスをすることぐらい」という。

生徒が題材にしたのは、戦争中に郵便局長として通信を担っていた方の話や、戦後の厳しい時代に級友の教科書を書き写して学校で勉強したというエピソード。作品を視聴すると、自分の言葉で再構築することで、自分の生き方とも関連づけて考えられるようになったことがうかがえる。

活動を通して得たものもさまざまだ。「奄美方言をもっと有名にしたいと考えるようになった」、涙ながらに語られた戦後の苦労話を聞き「今の生活が当たり前だと考えてはいけな」と思った。「自分も今が苦労する」ときだと思った」、親とも地域のことを

話すようになった。」「母にも島を知ること、人生の先輩から生き方を学ぶことはとても大事なことと言われました」と活動は保護者からも評価されているようだ。

「自分たちが当たり前と思っていたことを都会の人に、すごいと言われて嬉しかった」という川原さんに見られるように、島の大学生や研究者と触れ合ったことで地域への視座が変わった。玉利さんは「大学生が自分たちより奄美のことをよく知っていて、島の良さに改めて気付いた」ことが大きく、これをきっかけに自分も島の発展に役に立ちたいと考えるようになった。今、彼は経済学部を志望しており、県外の大学で学び、島に帰ってくる夢を描いている。

#### School Data

1949年創立/普通科・情報処理科/生徒数99人(男子48人、女子51人)/進路状況(2016年度) 大学・短大9人、専門学校15人、就職13人、その他0人